

ゼミにおける野外活動

— 2015年度と2016年度 —

小松原 尚

はじめに

地理（学）にあつては、学校教育と密接な関係にある。その中で、「巡検」というフィールドスタディーは、学術大会や大学の地理教育の場面では不可欠のものであり、その研究蓄積は多大である。また、教育職員養成課程（教職課程）にあつても地理的な観点からの野外活動として、「巡検」が教育課程の中に採用されている。

そして、こうした野外活動の実践は、教職課程を持たない大学においても学外活動として行われるようになってきている。例えば、本学におけるゼミも2001年度に地域創造学部開設以降、大学周辺、世界遺産に登録をみている古都奈良を学びの場として活用し、教員それぞれが様々な手段・方法でその成果を世に問い、少なからず学内外からの評価を得ている。

さらに、学年進行に伴い、その活動範囲を県全域のみならず、近県さらには海外にも拡大し、学生の地域認識の陶冶と調査活動の取りまとめの能力の養成に一定の実績を積んでいる。この背景には、学生の学びの場や教育活動のための素材となる場所を学習空間と定義すると、ここでの教育活動は、座学で得た知識を定着する上で、学外活動が有効であるとの認識からかと思う。

われわれは、2013年度より文部科学省の公募による「地（知）の拠点整備事業」の一環として、「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」の事業に取組んだ。本稿で取り上げるゼミ活動もその一環に位置づく。この事業は、文部科学省の公募要領にも記されているように、大学教育改革と自治体（地域、都市）の再生や活性化とを連動させるものであった。

調査報告

都市と大学とのかかわりは、自治体や産業への人的貢献のみをもって足りるわけではない。実態としての大学の立地とそこにおける人的側面との関連性も見逃せない。自治体と大学、それぞれの組織を構成する住民、自治体職員、企業、大学教員、学生が相互に情報を出し合いながら、学生自らの学習空間を形成している。本稿に掲載の2本の報告はその様子を学生視点から記したものである。ゼミ授業における学外活動は表に示しておいた。因みに、卒業後の進路では4人中3人が公務員として就職した。それぞれ、近畿圏の政令指定都市、都道府県庁所在都市、大都市近郊都市であったことを考えると、学外活動のための学習空間充実の成果とも考えられる。

表 ゼミ授業における小松原が引率にかかわった学外活動
(2015年度)

番号	活動日	活動のテーマや対象	所在地
1	2015/05/24	経済地理学会大会の小研究集会「産業観光は楽しい」聴講	尼崎市
2	2015/06/20	①インテックス大阪での高校生対象の模擬授業参観 ②野鳥園臨港緑地（大阪南港野鳥園）での体験活動	大阪市住之江区
3	2015/07/20	奈良県立美術館「田中一光/美の軌跡」展	奈良市
4	2015/11/09	①伊丹スカイパーク、大阪国際空港周辺の観察活動	伊丹市、豊中市
		②アサヒビール吹田工場見学	吹田市
5	2015/11/23	奈良県立美術館「- 錦絵誕生250年 - 浮世絵版画/美の大世界」展	奈良市
6	2016/01/15	①トヨタ産業技術記念館見学	名古屋市西区
		②リニア・鉄道館見学	名古屋市港区

(2016年度)

番号	活動日	活動のテーマや対象	所在地
7	2016/07/09	琵琶湖疎水記念館、京都国立近代美術館、京都伝統産業ふれあい館	京都市
8	2016/09/06	奈良県立美術館、奈良県にゆかりの富本健吉の作品の鑑賞	奈良市
9	2017/02/14	アサヒ飲料明石工場とヤクルト本社兵庫三木工場の見学	兵庫県

報告 I

(2015年度【小松原】専門ゼミ学外活動より転載)

1. 黒滝村 (2015年2月17日)

【学生A】「奈良県のへそ」とも言われる黒滝村は、その面積のほとんどを森林で覆われており、買い物難民も多い。そのため村内を循環するバスも通っていたが、本数は少ないようだった。村長さんはとても優しく話しやすい方で、黒滝村のキャラクターである猪のクロタンについて、私が、どうして「豚」を村のキャラクターに？と聞いてしまったときにも、笑って猪だと教えてくださった。木材の加工技術も素晴らしく、木から作ったとは思えないような繊細な置物から、木の性質や特性を知りつくし利用した作品等、こんな木材の活用の仕方がされているのかと初めて知ったとともに、村の方の自信や村への愛着も感じる事ができた。黒滝村のような山間に行くことの大変さ、そしてそのような地域で生活していくことの苦労を体感できたこの調査は、私にとって初めてのゼミでの調査であったが、その後大学で授業や研究を進めるに当たって過疎地域について具体的なイメージを持つことができる良いきっかけになったため、大変貴重な機会であった。◆黒滝村は奈良県の中央に位置し、「奈良のへそ」というキャッチフレーズもある。村の総面積の約97%を林野が占め、林業が村の主産業である。

【学生B】吉野山の南に位置する黒滝村は、修験道との関わりが深く、大峯山修験道の開祖とされる役行者が、白鳳六年(672)に勅命により国家安泰

調査報告

の祈願道場として開山したことに始まる。その後、修験道中興の祖理源大師聖宝が寛平七年（895）に鳳閣寺を開き、修験の拠点とした。◆黒滝村は平成24年7月に村制100周年を迎えたことを契機に、同じく同年7月に大阪の主要観光エリアである新世界・通天閣が100周年を迎えた大阪市浪速区と都市間交流を始めることになった。都心繁華街の浪速区と大自然の黒滝村という異種都市の新たな連携を作り出すためのものであり、今後様々な連携・交流を図っていく。

【学生C】黒滝村では、古くから盛んであった林業の過疎化に伴う現状を調査した。黒滝村までは小型観光バスで移動し、到着してからはまず役場にて、村長から直接お話を伺うことが出来た。村長から黒滝村の説明や林業について、またそれらの現状を伺っただけでなく、私たちがバスから黒滝村に到着するまでの様子で気付いたことなどを村長に伝えた。また、林業がどのように営まれているか知るため、実際山口木工さんに訪ねた。ここでは実際に制作された作品を見て、ここでしか出来ない技法や精巧な技を知ることとなった。黒滝村の林業が、歴史を通して大阪のピリケン像やその他の建造にも大きな貢献を成していたことがわかった。黒滝村は過疎化で人口減少が進んでいるが、伝統ある産業が残されており、私たちはそれを知っていかなければならない。

【学生D】村役場の皆さんから、黒滝村の3つの課題についてお話を伺った。まず、林業についてである。黒滝村は吉野林業の生産地の一つであり、林業は村の基幹産業である。しかし、山の管理が行き届いておらず、山が廃れていっているという。山守制度や森林組合があるものの、世代を渡っていくにつれて山が放置されつつある。次に、集落の維持についてである。人口減少が進んでおり、村の対策として黒滝村に住むと授業料を無料にする制度や空き家を譲る制度を設けている。また、村内の高齢者のために無料のふれあいバスを運行している。最後に、観光ルートの確立ができていないという課題を挙げられていた。交通が不便であることが要因の1つと考えられる。◆山口木工での聞き取り調査では、伝統工芸士である山口さんから「水組み」や吉野杉の特徴などについてお話を伺った。◆その他、現在は歴史民俗資料館

となっている旧役場庁舎、生活体験学習館「庄屋の家」、道の駅を訪れた。

2. 大阪湾岸 (2015年6月20日)

【学生A】大阪港湾地域の観察調査へ行き、その後インテックス大阪で行われた夢ナビに出演する小松原先生を観に行った。大阪港湾地域を歩き回り野鳥園臨港緑地へたどり着いたのだが、人はほとんどおらず、決してきれいとは言えない古びたような野鳥園であった。しっかり整備すれば自然豊かな観光資源として栄えそうだと感じた。しかし先生曰く土日になると家族で遊びに来るような人が多いそうだ。それにしても野鳥園に行くまでの道も日陰がなく、同じような工場やコンテナ等の景色が続いていたため、その道自体も楽しめるような工夫もされていれば良いと感じた。周辺地域と観光資源をつなげるような視点を、この調査では得ることができたと感じている。インテックス大阪での夢ナビでは、大きなイベントの多いインテックスでも施設内のコンビニの品揃えが最悪であったり、最寄り駅周辺や電車内の混み具合が甚だしかったため、もう少し安全面や利便性を追求できないか、という点に疑問を感じた。

【学生B】3年生4名、留学生1名の計5名での活動となった。「インテックス大阪」での高校生への大学の広報活動である「夢ナビ」のショートレクチャーを見学した後、大阪南港野鳥園まで徒歩で移動し、景観観察を行った。その後園内を散策し、木々や草花を観察した。北観察所にて大阪湾岸の水鳥や湿地の様子などを観察した。再びインテックス大阪に戻り、30分間の小松原先生の講義「17世紀は海の底－大阪湾沿岸域の歩き方－」を見学した。大阪湾沿岸域がどのように拡張されてきたのか土地利用の変遷と、産業観光についての講義であった。インテックス大阪でのイベントが終了すると、大阪市営地下鉄中央線のコスモスクエア駅まで移動し、大阪湾沿岸の工場風景などを観察した。その後コスモスクエア駅で解散した。

【学生C】大阪南港地区にある野鳥園入り口で写真撮影した。大阪南港付近は以前多くの干潟が見られたが、現在は工場が立ち並び干潟が減少している。そこで今野鳥の休息地となっているのが、この野鳥園だ。園内は緑豊かであり、多種多様な木が見られた。そしていくつかある観察所のうち、北観察所

調査報告

では、干潟に休む野鳥を観察することが出来た。干潟の奥には工場が並んでおり、工場地帯へと変遷していった中で残された数少ない干潟である様子が窺えた。小松原先生が高校生に産業観光について夢ナビで講演し、野鳥園と工場立地を見た後だったので、産業観光をどのような視点で楽しむのか考えることとなった。最後に、電車で帰る際にコスモスクエア駅から南港を俯瞰で見ることができた。大阪南港の土地利用の変化を考えながら、今回訪れた場所を考えると、残っている部分の小ささを感じた。

【学生D】 インテックス大阪で開催された「夢ナビライブ」にて講義を受けた。高校生が進路を考えるためのイベントであるが、様々な学問に触れることができ、良い刺激になった。「夢ナビトーク」で経済地理学と産業観光との関連をふまえた上で、大阪南港野鳥園を見学した。野鳥園は、進行する埋め立て事業の中で野鳥を保護するために設置されたものである。大阪南港の産業発展の過程で生まれたという点で、産業観光と関係があるといえる。◆夢ナビライブ「17世紀は海の底ー大阪湾沿岸域の歩き方ー」では、大阪湾が農業的土地利用から工業的土地利用へと移行し、日本産業を牽引する工業地帯となったことを確認した。そして、中国や韓国の台頭により重工長大産業は縮小していき、代わってレジャー施設が立地するサービスの生産・消費の場へと変化したことを確認した。その後、インテックス大阪からコスモスクエア駅間の様子を観察し、大阪湾沿岸地域の土地利用について理解を深めた。

3. 大阪国際（伊丹）空港（2015年11月9日）

【学生A】 伊丹空港周辺の学修空間環境調査を行った。阪急の曽根駅から空港まで歩いたが、やはり空港に近づくにつれて飛行機の離着陸の音は非常に大きくなっていった。空港の下のトンネルを通ることは人にはオススメできない。ファンが無く空気が悪いということ、歩道を通る自転車が多いこと、それなのに歩道が狭いため自転車とすれ違うことが危なく難しいこと、が理由として挙げられる。空港周辺には危険だと感じる箇所もあったが、空港内ターミナルビルやスカイパークは観光の一部として楽しめる内容になっていた。また、観光としてだけでなく近所の方が散歩コースに利用したり、家具等の日用品を購入することも可能であった。ターゲットが観光客だけに絞ら

れていないということで、伊丹空港は騒音に悩まされる立場である近隣の住民の評価を得て、バランスのとれた施設という立場を手に入れたのかもしれない。

【学生B】午前9時に阪急梅田駅に集合し、阪急宝塚線曾根駅まで乗車した。曾根駅からは伊丹スカイパークを目指して徒歩で移動し、同時に景観観察も行った。途中、千里川沿いの航空機侵入地点にも立ち寄った。次から次へと着陸態勢に入る航空機を真下から仰ぎ見ることができた。伊丹スカイパークはいくつかのゾーンに分かれていて、遊具も設置されている。駐車場も併設されているので車での来場も可能である。航空機の離発着を間近で見られたが、同時に航空機はものすごい騒音だということを身をもって感じた。その後兵庫県道・大阪府道99号線を横断し、伊丹空港へと移動した。空港内にはコンビニや飲食店、土産物を扱うお店、生活雑貨を扱うお店など多数入っていた。伊丹スカイパークや空港周辺は、廃棄物の中間処理施設や下水処理場、流通関係の工場や航空関係の会社などが見受けられた。

【学生C】大阪国際空港までは、阪急曾根駅から徒歩で移動した。空港に到着するまでの道中における写真にて記録した。飛行機に最も近づくことが出来る地点では、千里川沿いの道は、飛行機の離着陸の滑走とごく近くにあり、曇りにもかかわらず何人かが写真撮影に訪れていた。また国際空港と並行して、伊丹スカイパークがある。今回このスカイパークを通過して移動した。スカイパークでは空港建設に至るまで普通の村であった様子や、その後の騒音に関する問題も知ることが出来た。また滑走路の真横で、自然あふれる公園となっているため、散歩する人や遊んでいる園児などが見受けられた。スカイパークを抜け、空港に行くために滑走路の地下を横切って移動の写真もある。交通量の多い県道であり、地下トンネルは長いので、徒歩で移動する際は注意が必要だ。空港に着いた時の外観と、内部の様子も撮影した。デッキから滑走路を見ると、自分たちが滑走路を挟んで向かい側からやってきたことが分かった。

【学生D】大阪国際空港周辺の整備状況と土地利用を観察した。空港周辺は文教住宅と工場用地がはっきりと分かれており、「豊中市伊丹市クリーンラ

調査報告

ンド]、「伊丹市環境クリーンセンター」等、廃棄物処理場や下水場が固まって立地していた。千里川沿いからは、離着陸する飛行機を間近で見ることができた。◆「伊丹スカイパーク」のパークセンターでは、岩屋遺跡の出土品と神津地区の歴史に関する展示がされていた。出土品は空港建設工事中に発見されたものであり、石包丁などの出土品から、神津地区では縄文時代から稲作が行われていたことが読みとれる。◆「伊丹スカイパーク」内の観察を終えると、滑走路地下の県道を徒歩にて横断し、大阪国際空港ターミナルビルに向かった。道中は流通・食品・製造会社が目立った。ターミナルビルの展望デッキからは、滑走路全体を見渡すことができた。◆空港周辺を実際に歩いて観察したことで、土地利用の変化について体験的に学習することができた。

4. アサヒビール吹田工場（2015年11月9日）

【学生A】大きな工場の見学ツアーには参加者が多く、一日に何回か分けて行われるほどであるということを知った。しかし多くの参加者は最後の試飲を一番の目的として来ているようだった。動機がどうであれ、かつては公害のイメージも強かった「工場」というものが、人々が楽しめる場所になってきているということ、そのことを通じて工場の中の人も見られているという緊張感をもって仕事に取り組むことができるということ、自然環境保全活動を行っているなど新たな工場の姿を知るきっかけになるということ等、工場見学は娯楽としてだけでなく、生産者と消費者の距離を近くし、互いのことをよく知ることができる機会の提供もしているのだと身を以て学んだ。また、アサヒビール工場見学を進めていた方が素晴らしい接客をしてくださり、対応能力には見入ってしまった。アルバイトが工場見学等を進めるところもあると私は聞いたことがあるが、アサヒビール工場はアルバイトではないと感じたし、アルバイトがあのかオリティで接客をするには相当研修しないといけないだろうと感じた。

【学生B】アサヒビール吹田工場は竣工が1891年とアサヒビールの中でも一番古い工場である。ここで製造された商品は主に近畿地方や中国地方へと流通している。工場に足を踏み入れると、ろ過装置や発酵・熟成タンクを目に

することができる。エントランス付近には竣工当時のレンガの壁面をそのまま移設したものや、創業当時のビール工場の象徴である煙突の「兜」のモニュメントなどがある。見学ツアーの待ち合わせ場所にはギフトショップやアサヒビールの歴史をまとめた年表が展示してある。見学ツアーが始まるとはじめに10分間映像を見て、ビールができるまでのおおまかな流れを把握する。その後工場見学に移り、ビールの主原料である麦芽やホップを手にとりて見ることができる。仕込み、発酵・熟成、ろ過、瓶詰め・缶詰め工程の説明を受け、品質管理や環境保護の取り組みなどの説明も受ける。最後に試飲があり、ドライバーや子ども、妊婦などはアサヒ飲料のソフトドリンクを、飲酒が可能な人はビールの試飲となっており、ビールの場合は3杯までの適正飲酒となっている。

【学生C】アサヒビール工場へ来る道中は分からなかったが、工場敷地内へ一歩入ると大きなタンクや何かの設備がすぐに目に入った。貯蔵タンクには発酵段階のビールが入っているようである。工場の玄関部分のみ当初のものであり、窓にはガラス細工が施されていた。そしてビール工場見学ツアーの待ち合わせ中、ロビーには物品販売店があり、工場限定の商品やビールに合うものなどが売られていた。またツアー参加者は、幅広い年齢でカップルや何かのグループなどさまざまな人が参加していたように思う。工場見学はまず、映像によるアサヒビールとビール生産の説明から始まり、ルートを回りながらビールの歴史、生産過程を学んだ。また見学の最後には、試飲をすることが出来た。普段とちがいがおいしい入れ方で注いでくださり、さらに三種類のビールの違いを試すことも出来るため、周りの方も楽しんでた。

【学生D】まず企業紹介の映像を視聴した。ビール製造から出荷までを3日以内で行い鮮度を保っていること、森林の保全活動、品質保証システムなどについて紹介があった。アサヒビールでは、各工程の担当者のチェックを通過しないと次の行程に進めないというシステムを採用している。◆次に、ビールの原料であるホップに触れたり、製造工程を見学した。官能検査以外は、ほぼ機械化されていた。野外発酵熟成タンクは直径7m、高さはビル5階建てに相当し、24時間体制で0.1度単位の温度管理がされている。

調査報告

環境問題への取組を紹介するコーナーがあり、廃棄物再資源化100%を実現していることを知った。見学の最後には試飲を楽しんだ。◆今回の工場見学を通して、生産工程を一般公開することで、消費者の信頼獲得や企業イメージの向上につながることを実感した。また、17種類ものビールを製造していること、使用済みのビール酵母が健康サプリメントとして販売されているなど、数多くの発見があった。

5. トヨタ産業技術記念館（2016年1月15日）

【学生A】産業は軽工業から重工業という順に発展したのだ、と私は学んでいたが、トヨタはまさに蒸気機関で動く織機による繊維業から自動車の開発へと進んでおり、なんとなく学んだことの実例を目の当たりにできた。小学生もたくさん来ていたので、このように産業の歴史や仕組みなどを楽しく説明してもらえ、理解できる場合は確かに価値のあるものだと感じ、産業観光の可能性を改めて感じる事ができた。また、車の部品を作るために鉄を流し込む型を砂で作っている、という点が非常に興味深かった。砂で作るため、鉄が固まったらハンマーで型を叩き壊せば良いし、その後何度でも再び型として使えるからである。環境にも良く、作業効率も良い仕組みであると私は感じた。トヨタの説明は慣れている感じがして、少し流れ作業のようでそっけなかったが、子供も大人も楽しめる施設であった。

【学生D】記念館には小中学生の他、企業関係者とみられる人達も見学に来ており、教育旅行や校外活動、臨地研修の場として活用されていることを実感した。記念館は大きく繊維機械館と自動車館に分けられる。繊維機械館では、糸がどのように紡がれるのか学んだ後、ガラ紡機やリング精紡機が稼働している様子を見学した。案内人の方から作業効率化の工夫や技術の進歩についてお話を伺った。◆自動車館では、自動車の生産技術の変遷について学んだ。当初、自動車のボデーパネルの製造や塗装は手作業で行われていたことや「G1型トラック」製造にいたるまでの経緯などを知った。「G1型トラック」は日本初のトラックであり、骨組みが木で作られていること、タイヤに泥はね防止のためのブラシが付いているといった特徴がある。また、現在の鍛造、部品の溶接、塗装の様子を見学した。最後に、自動車の普及に伴って

事故が増加したことを背景に、安全技術も発達していったことを学んだ。

6. リニア・鉄道館（2016年1月15日）

【学生A】歴代の新幹線など展示されている鉄道全てに私は乗ったが、小学生時代、よく新幹線に乗っていた私は昔の新幹線に乗ることで当時の記憶を思い出し、非常に懐かしさを感じた。私が昔の新幹線に乗って感じたような気持ちを、もっと年上の方は他の鉄道を見て乗ることで感じているのだろうと思った。そう考えると、このリニア・鉄道館は人々の記憶を蘇らせるような観光資源なのだと感じた。また、リニアのミニチュアが走っているのを見ることが出来たのだが、磁力で浮いて走行するというのを私は魔法のように感じており、あまり信じていなかった。実際に本当に浮いて走行しているのを見ることができたのでテンションがあがり、感動を覚えた。しかし、リニアの磁力が周辺地域の環境に悪影響を与えるという話を聞いたことがあるので、その真偽をリニア・鉄道館という公式の施設で知ることが出来なかったのは残念であった。

【学生D】鉄道の仕組みや技術の発展について学んだ。リニア・鉄道館では、蒸気機関車、在来線、そして新幹線の実物車両が39両展示されている。多くの車両が内部も公開されており、乗客が入れない調理場の様子も見ることができた。大正期の電車は、つり皮がなかったり、あっても現在と形状が異なっていた。当時は金属加工技術がなかったため、木製の車体で温かみのある雰囲気印象的だった。◆「超電導リニア展示室」にて浮上走行する仕組みを理解した。リニアは1995年に製造され、2003年には世界最高記録を打ち出している。ミニシアターでは、その走行スピードを疑似体験することができた。◆リニア・鉄道館は、パンタグラフを動かしたり、分岐器を転換できるコーナー、運転と車掌を体験できるシミュレータ、「体験学習室」が設置されており、楽しく学習できる場が提供されている。子供から大人まで楽しめる工夫がされており、細部まで作りこまれた「鉄道ジオラマ」には大人も見入っていた。

7. 明治大阪工場（2016年2月23日、高槻）

【学生A】工場見学ツアーは、見学時間が長くても短くてもホスピタリティ

調査報告

の質次第で客の感想が変わるのだということを、改めて感じた。明治の工場見学はあらゆる年齢層が楽しめそうな空間であったため、工場見学が想像より早く終わっても、売店がなくても、満足感を持って帰ることができた。壁にキャラクターやお菓子の模様をデザインしてあり、工場の目の前を流れるラインで作っていたカールがキュートなロボットによって見学通路に飛ばされてきてその場で食べられるという演出があるなど、客が子供でも大人でも楽しめるような工夫が多かった。また、放置された里山を企業がボランティアで再生する制度が大阪府にはあるらしいのだが、明治大阪工場はこれに参画しており、たけのこの里やきのこの山が誕生した故郷である高槻市郊外の里山で竹林の間伐を行っているようだ。たけのこの里やきのこの山に故郷があるということにまず驚き、しかもそれが高槻であるということにさらに驚いた。

【学生B】工場に入ってすぐのところには明治の商品が多数陳列されている。なかの講義室はカールおじさんなどのキャラクターのカーテンがされており、そこでチョコレートに関する映像を見た。その後、工場見学へと移り、チョコレートの輸入から商品の製造、流通という流れについて模型で確認した。工場見学では具体的には「カール」の製造ラインと「きのこの山」の製造ラインを見学した。お菓子という食品工場であるからか、工場見学ありきで通路などの見学コースが設計されている印象を受けた。ただし、ここは売店などのお土産を買える店はなかった。

【学生C】明治大阪工場へはバスで移動した。工場の入り口には明治の代表的なキャラクターであるカールおじさんが出迎えていた。見学ツアーではまず、講義室でチョコレートの歴史や明治の生産の説明を受けた。この説明では品質チェックを賞味期限がすぎるとまで行っているという話の他、カールという商品は油であげない日本初のスナックであるなどの話が印象に残った。工場内部は撮影禁止のため、講義室内で撮影用にいろいろなお菓子やキャラクターが置かれていた。また、お菓子の被り物や、今まで発売されたパッケージ違いの商品なども置かれていた。また講義室の外には商品展示コーナーがあり、見たことのない商品、今と全くパッケージが違うものなど、明治が生

産してきた種類の多さを目で見て体感することが出来るようになっていた。

【学生D】講義室内で企業紹介ビデオを視聴し、スタッフから見学に際しての諸注意を受けた。ビデオの内容は、各商品の製造工程や環境問題に対する取組の紹介であった。その後、グループに分かれて、カールときのこの山がつくられる様子を見学した。カールはトウモロコシでつくられた世界初のスナックだそうだ。カールは油で揚げておらず、生地を乾燥させることでサクサクの食感を生み出している。機械でカットされていくカールを見学したり、できたてを試食するなどした。きのこの山の製造エリアでは、チョコレートが型に流し込まれている様子などを見学した。◆工場見学で印象的だったのは、グリコぴあ神戸と比べ、衛生管理の徹底を強調していた点である。ビデオで製造エリアに異物が混入しないようにしている様子を紹介し、見学エリアには作業服が展示されており、その仕組みについての説明があった。同じ業界であっても、消費者に訴えたいポイントは異なる場合があると分かった。

8. グリコぴあ神戸（2016年2月23日）

【学生A】グリコは工場見学の対象年齢が全体的に少し幼いように感じ、しかも客を放置する時間が長かったため、明治と同じくらいの見学時間だったはずだがグリコのほうがより退屈だったように感じている。グリコの工場では、目の前の製造ラインで作っているものが「ちょうど本日新発売の」製品であったり、「ちょうど今月発売さればかりの」製品であることが多かった。そしてそれが最後の売店で売られていた。これは新発売であることの宣伝のために、見学通路の目の前にその製品の製造ラインを持ってくるようにしているのか、偶然なのか、気になった。工場付近はお菓子の匂いが漂っており、見学者がたまに匂いを嗅ぐ分には良いが、近くで生活している人にとっては公害に近いものになっているのではないかと、少し心配になった。

【学生B】今回の課外活動は2年生の地域経済コモンズのバスツアーに、3年生の専門ゼミIが参加するという形での活動であった。はじめに映像を見て、過去の歴代広告を観察した。その後工場見学で「ポッキー」や「バトンロール」の製造ラインを見学し、チョコレートの歴史やビスケットの歴史などを学修した。休憩室には「グリコ」の歴代のおもちゃが展示されており、それ

調査報告

らを観察した。江崎グリコの商品を扱った売店も併設されている。

【学生C】グリコぴあの見学ツアーでは、明治の見学ツアーと同様、まず映像においてチョコレートの製造過程やグリコの歴史などの紹介を受けた。その後移動して広告ポスターの展示を見ながら説明を聞いた。ここではグリコについている子供のおもちゃの変化や、グリコの自動販売機の説明など、時代によって商品にどのような付加価値を付けているのかを知ることが出来た。また工場内部は撮影禁止であったが、ところどころにある展示スペースでは解説をしてくださり、撮影も出来た。写真にあるカカオの木の場所には、香りかけの実物も用意されており、知識だけでなく香りでもカカオを知ることが出来るようになっている。休憩室にはグリコの歴代おもちゃの展示があった他、売店があり、工場限定のお菓子、本日発売予定となっていたお菓子など、見学しなければ手に入らないものも多い。初めに説明を受けた自動販売機もあった。

【学生D】はじめにビデオを視聴し、カカオ豆からチョコレートになるまでを学んだ。次に、案内人の方からグリコの歴史についての説明があった。グリコの自動販売機や年代別の広告ポスターを見学した。◆ポッキーとプリッツの製造工程の見学では、チョコレートを練り上げる「コンチェ」という機械や原料混合機について説明を受けた。また、市場に流通する前の新商品を目にすることができた。

報告Ⅱ

(奈良県立大学リポジトリ掲載の「OUR COLLEGE LIFE 2017. 3. 15. 奈良県立大学卒業記念誌 小松原ゼミ」より説明文のみ抜粋)

1 【学生A】の場合

(1) 専門ゼミでの活動

i) 初のゼミでのフィールドワークで黒滝村へ・・・

初めてのフィールドワークだったため緊張していましたが、村長さんも役所の方も優しく迎えてくださいました。同じ日本という国の同じ県の中で、お風呂の沸かし方が全然違ったり、買い物に行くのも一苦労な生活をしてい

る人々がいるということ、知ってはいたものの、やはり目の前で話されると感じ方がだいぶ違い、非常に身近な存在に感じました。役所の方が我々学生や先生の意見を熱心に聞いてくださることに感動し、「役所の人」へのイメージが少し変わりました。「若い人が来てくれるのを楽しみにしていた」と語る村長さんが印象的で、肌を通して村の寂しい現状が伝わってきました。

ii) 家の近くのアサヒビール工場

大きな工場の見学ツアーには参加者が多く、一日に何回か分けて行われるほどであるということを知りました。多くの参加者は最後の試飲が一番の目的として来ているようでしたが、それでも、かつては公害のイメージも強かった「工場」というものが人々が楽しめる場所になってきているということ、そのことを通じて工場の中の人も見られているという緊張感をもって仕事に取り組むことができるということ、自然環境保全活動を行っているなど新たな工場の姿を知るきっかけになるということ等、工場見学は娯楽としてだけでなく、生産者と消費者の距離を近くし、互いのことをよく知ることができる機会の提供もしているのだと身を以て学びました。工場案内の方の接客が素晴らしく、これがプロなのだと感じました。

iii) バスで吉野の森ツアー

ツアーに参加している客層は泉谷さんの木材商店の同業者や身内感のある人が多く、何の関係もない人で参加しているのは私たちともう一人近畿大学の学生くらいだったのですが、一般の方でも参加したら絶対に楽しめるだろうと感じたため、もっと客が増えても良いように思いました。奈良カエデの郷ひららで1500円相当の豪華なお弁当をいただき、そこでお土産も買うことができ、途中で二つほど寄った道の駅でもお土産を買うことが出来るようになっていただけでなく、久保本家酒造でもたっぷり試飲ができて地酒のお土産を購入できるようになっており、食べ物やお土産購入の面でも充実したツアーだったと感じました。

(2) 中小企業へ行ってみました

i) ぱーぶるでお馴染み株式会社エヌ・アイ・プランニング

大学の友人率いる学生組織AddVentureが主催のイベントに参加しました。

調査報告

奈良ではお馴染みの雑誌「ば～ぶる」を製作していることで有名な中小企業への見学ツアーです。秋には県大の秋華祭を記事に取り上げてもらえる機会もあり、奈良の身近で楽しく面白い内容を取り扱っているイメージがありました。中小企業でクリエイティブな仕事に携わることのやりがいや大変さ等のお話を聞けて私はとても刺激を受け、これが中小企業に魅力を感じ始めたきっかけになりました。大好きな奈良を誰かに伝えられるような仕事に憧れがあったので、この時出会った社員さんのキラキラした表情はとても素敵にみえました。

ii) ロボットアームのアクティブリンク株式会社

奈良ひとまち大学とAddventureの共催企画で伺ったアクティブリンク株式会社。農業や介護の面でも役立つであろうパワーアシストスーツ等、日本の未来を支える技術が奈良の小さな企業でも研究されているのだと知ることができ、とても良い経験でした。文系でも熱意があれば入社できるという話も聞くことができ、私を含めその場にいた学生たちは良い刺激を受けたと思います。通常重たいものはクレーンで持ち上げますが、災害時に車輪のあるものだとどうしても活動範囲が狭まってしまう、ということでアシストスーツが考えられたそうです。年齢や性別に関係なく生活や労働を行える機会を提供し、「パワーバリアレス社会」を実現することで格差をなくしたいと考えているアクティブリンク。奈良から日本、さらに世界の将来を考えて開発を続ける企業を知り、とても誇りに感じました。

iii) 日本以外の国の方にも人気の大仏プリン株式会社

奈良ひとまち大学の企画で大仏プリン株式会社へ伺いました。本店であるプリンの森には社長夫妻のこだわりが詰め込まれていて、プリンの中に迷い込んだような建物、氷の形や看板、床のタイルなど細かいところまでプリンのやわらかさ、可愛らしさが意識されていました。客が気付くか気づかないかのレベルまでこだわる姿は非常にカッコいいとも思いました。ソフトクリームも丸っこかったり、夜になると点灯するツリーのライトに大仏プリンのピンが使われていたり、こだわりを挙げだすときりがありません。大人気商品、大仏プリンを生み出すまでたくさんの苦勞をしてきた社長夫妻。

お話をきくことで中小企業の苦しい現状と可能性を知ることができた、貴重な経験になりました。

(3) 地域活動・アルバイト・インターンシップ

i) 宇陀市特産品審査委員会に参加

小松原先生からの紹介で、三回生の冬頃から宇陀市の特産品審査委員会に参加しました。宇陀市のことは全く何も知らなかったのですが、非常に楽しく取り組ませていただきました。観光地である奈良で地域の問題や観光について勉学を続けるにあたり、県だけでなく市町村がどのようなものをどのようにして特産品と認め、売り出していくと決定するのかを知ることは、奈良の観光や地域としての可能性をよりリアルに考えるために必要なことだと感じました。また、中小企業のように資金をなかなか用意できない企業が、どんな工夫をして宇陀市のアピールをしようと策を練っているのか知ることができる貴重な機会でした。

ii) アルバイトを通して知った、奈良のうまいもの

せっかくだから奈良でアルバイトしたい！と思っていた私は、2回生の夏から4回生の3月までJR奈良駅の下にある「奈良のうまいものプラザ」でアルバイトをしていました。ここは奈良の様々なお土産や野菜などの食材を扱っていて、さらに奥には奈良の食材を使ったレストランも併設されています。奈良について何も知らない私でしたが、店長やお客さん達に奈良の素敵なものをたくさん教えてもらいました。そしてどんどん奈良が好きになっていった私は奈良で働きたいと思い、奈良で就職活動をしました。就職活動の面接ではアルバイト内容について聞かれることが多かったのですが、長い間働いていたため自信をもってなんでも答えることができました。上で挙げた、宇陀市特産品審査委員会で私が審査した商品を店頭で扱うことも多く、貴重な良い体験がたくさんできました。時給で選ばず、働きたい場所と仕事内容でアルバイト先を選んで本当によかったと思っています。

iii) 上牧町役場でインターンシップ

3回生の3/22から3/25まで、上牧町役場のインターンシップに参加しました。秋に上牧町のベガサスフェスタというイベントで軽音楽部の私のバンド

調査報告

がライブをさせていただいたときにちらっとインターンシップの話聞き、ご縁があって参加させていただけることになりました。職員の方の資料作成の様子をすぐ横から覗くことを許していただけのため、多くの仕事を一度にこなしていく役場職員の仕事風景を間近で観察することができました。皆さんが優しすぎてまるでお客さんのように扱われてしまいましたが、何を質問しても優しく答えていただけて非常にためになるインターンシップでした。

(4) 委員会活動・部活・学外活動

i) 生協学生委員会

1回生から3回生の夏まで生協学生委員会に所属していました。組合員からの出資金で成り立つ生協。学生委員として、組合員によりよい大学生生活を送ってもらおうと様々な企画・活動をしてきました。私は新学期部門という部門で、入試前日の受験生の緊張をほぐしたり、入試当日には宿泊しているホテルから大学まで道案内をするような受験宿泊係のリーダーを担当していました。またウィンターパーティーの食品部門リーダー、新入生サポートセンター系の副リーダーなども担当しました。組織で活動することの難しさを何度も体感し、自分の得意なポジション苦手なポジション等も知ることができました。生協学生委員会に入ったことで新たな自分をたくさん知り、成長することができました。

ii) 軽音楽部

大学からドラムを初め、4年間ずっとドラムを叩いていました。2回生から3回生にかけて、副部長も務めました。ここでも集団、組織をまとめることの難しさを感じましたが、なにより部員に、自分も軽音楽部の一員として参加しているのだという自覚を持ちながら楽しんでもらうにはどうしたらいいかを考えるのが難しく感じました。イベントを企画する人(幹部)と出演する人・遊びに来る人(部員)の温度差を埋めることが個人的な目標でした。同期の部員はみな仲が良かったため、4年間無事にみんなで楽しく過ごせました。また様々な大学の人、ライブハウスの人、バンドマンの人と知り合いになり、軽音楽部に入ったからこそ色々な世界を知ることができたと思っています。ドラムは社会人になっても続けたいと思っています。

iii) ■■■高校吹奏楽部OBOG吹奏楽団B-Plus!

高校卒業後、すぐにこのOBOG吹奏楽団に入団しました。私は吹奏楽部の31期なのですが、B-Plus!の一番年上の先輩は現在8期で、年の差20歳以上の先輩も含め様々な年代の人たちが毎週日曜日に集まって練習しています。様々な職種の先輩方と定期的に会ってお話をして飲みに行き、遊んで楽器を吹いて、ということが出来るこの貴重な環境は本当にありがたいものだと思います。ここで私は現役広報係のリーダーやイベント係のリーダーをしていました。社会人になっても皆で楽しむために協力して組織を運営するこのB-Plus!という団体には尊敬の念しかありません。これからまだまだ団や演奏会を面白くしていくために、私ももっと働きます。社会人になっても楽しく続けていきたいと思っています。

2 【学生B】の場合

(1) ベトナム・カンボジアスタディツアー

2014年2月22日から3月5日にかけて、JAPF（一般財団法人 日本アジア振興財団：Japan Asia Promotion Foundation）が企画するツアーに参加した。JAPFとは、2006年に設立され、国際協力と人材育成を推進し、東南アジアの社会問題の解決に取り組みながら、カンボジアを中心としてタイ・ベトナムに年2回のインターンシップ研修、講演会、写真展等の国内外の事業を行っている団体である。このツアーは「ベトナム・カンボジアへ赴き、NPO・NGOや政府・国際機関の事業現場の視察等を通して、学生が自ら考え“考動”するきっかけになること」を目指しており、参加者は全員大学生である。

このツアーに参加したきっかけは、東南アジアというとマスコミなどではどこかまだ発展途上国のイメージで報道されているが、実際のところはどうなのだろうと思い、自分の目でその様子を確認してみたいと思い、今回参加した。ツアーの具体的な訪問先として、ベトナムでは、ベトナム戦争の戦争証跡博物館やクチトンネル、枯葉剤の影響を受けた人が入院しているTuDu病院を訪問したり、カンボジアでは、ポル・ポト政権下で多数の人が拷問を

調査報告

受け、虐殺された、トゥールスレン収容所やキリングフィールドを訪れたり、カンボジアの官公庁である文化芸術省や観光省を訪問したり、他にも地雷博物館や地雷の撤去を行っている国家機関であるCMACであったり、農村やゴミ山、プノンペン経済特区の視察、日本語学校や孤児院を訪問し、現地の学生や子どもたちと交流をしたり、小児病院やHIV病院を訪問したりもした。加えて、アンコールワットやマーケットの散策といった観光もあった。

このツアーに参加するまでは、「地雷＝人を殺す兵器」と思っていたが、地雷とは人を殺すことが目的ではなく、人の手足を奪ってけがをさせることが目的ということを知った。けがをさせることで相手方の戦力が減るし、自分の仲間が負傷した姿を間近で見ると、地雷の被害に遭うのは次は自分かもしれないと兵士の戦意喪失につながるという。対人型の地雷は5キログラムの圧力で爆発するといひ、プラスチック製で、錆びたり、腐ったりしない。大きさは手のひらよりも小さく、重さも思っていたよりも軽かった。およそ5ドルで取引されており、なかには1ドルで取引されているものもあるという。ちなみに、対戦車型の地雷は300～400キログラムで爆発するという。

このツアーの中で印象に残っているのが、KURATAペッパーでのクラタヒロノブさんの話である。彼は、三重県出身の日本人で、カンボジアでコショウを製造している会社の社長である。カンボジアの人々が自立するためには、現地の産業を再生させた方がよいと考え、いろいろと調べた結果、コショウが輸出しやすく、また、カンボジアのコショウはかつて世界一のコショウであったため、それを復活させた人である。

クラタさんの話によると、日本ではよくカンボジアに学校を建設するための募金が行われていたりする。そして、その募金によって学校が建設されたりしているが、実際には学校という建物があっても教える先生が不足しているため、学校が機能していないという。この話を聞いたとき、日本が行っている支援（募金活動）は現地のニーズに合っておらず、言葉は悪いが、自己満足の支援だったのかな…と考えさせられた。今までは何となく、学校を建設すれば子どもたちは学校に通うことができ、就学率も上がり、識字率も上がると安易に考えていたが、実際には、学校が不足していることだけでなく、

教師の数も不足しているという。なぜ、教師が不足しているかという、特に農村部の学校では、教師の給料は他の職業と比べて安く、また、交通費も支給されないからである。学校に通う子どもの方も、そもそも学校が遠かったり、経済的な理由や家の仕事をしなければならず、学校をやめる生徒も多いという。学校を建設すれば全て問題が解決ということではなく、教師不足を解消するためにはどうすべきか、子どもたちが学校を卒業できるようにするためにはどのような社会的要因、経済的要因等を解決しなければならないのかという、物事の本質を見極め、解決していくことが重要だと感じた。特に国際問題を考えるときには、地域の実情やバックグラウンドを理解することが何よりも大事ということに気づいた。

このツアーでは毎晩複数のグループに分かれて、ディスカッションをした。その日の訪問先にちなんだテーマが毎回与えられ、参加者それぞれが課題に向き合い、どうすべきか夜遅くまで議論した。簡単には結論が出せず議論が行き詰ったり、逆に議論が盛り上がり、「そろそろ終わりにするように」と止められることもあった。同世代の人とお互いの考えを伝え合い、ディスカッションできたということは貴重な経験だった。

(2) 弓道

中学時代から弓道に興味を持っており、大学から弓道をはじめた。弓道には「正射必中」という考え方がある。正射必中とは、「正しい射をすれば必ず的に矢が中（あた）る」という意味である。弓道には、弓矢を使って矢を射るまでの動作を八つに区切って説明した「射法八節」というものがある。矢を射るまでの一連の動作は、足踏み、胴作り、弓構え、打起し、引分け、会、離れ、残心（残身）と呼ばれる八つのステップに分かれており、この八つのステップを正しく行うことができれば、矢は必ず的に中る、とされている。この八つのステップは別々のものではなく、始めから終わりまで一連の動作で一貫した流れのように行わなければならない。弓道は技術面だけでなく、精神面も非常に関係するスポーツである。的に中（あ）てたいという欲が出てきてしまうと中らない。いつも通り正しい射形で、雑念を振り払うことでの的中という結果に結びつく。

調査報告

大学時代の弓道経験を通じて、普段の練習における基礎練習の大切さ、中らない時期が長く続いたとしてもめげずに基本に忠実に練習することの重要性、いつ何時も平常心でいることの大切さを学んだ。他にも、「組織力」、「組織マネージメント」について考えたのも、この大学の弓道部での経験が大きい。どのような声掛けをしたら相手の為になるのか、相手のやる気を引き出すことができるのかを悩み、考え、行動した時期でもあった。

大変なこともあったが、弓道を通じていろいろな人に出会い、様々な経験をする事ができたので、弓道をして良かったと心から思うことができる。今後も弓道が続けるかは未定だが、機会があればまた弓道をしたい。

(3) 大学生活を振り返って

大学生活を振り返って思うことは、自分が後悔しないように、いろいろと行動したなということである。先述のベトナム・カンボジアスタディツアーしかり、弓道しかり、ここでは述べていないが、オーストラリアのメルボルンに約1ヶ月間短期留学もした。他にも日々の生活を振り返っても、いろいろ経験したと思う。私はやらずに後悔するぐらいなら、やって後悔した方がよいと考えているので、「これしてみたいな…」「あれ興味あるな…」と思ったことは基本的にはやってきた。もちろん、全部が全部、実現したわけではない。また、やってはみたものの、大変だなと感じることも多々あった。でも、今振り返って思うことは、やって良かったということである。いろいろな経験ができたことはもちろん、それぞれの経験（出来事）を通じて新たな人と出会うことができたし、学ぶこともたくさんあったからだ。

今後もこの経験を糧に、いろいろなことに挑戦していきたい。

3 【学生C】の場合

(1) 長浜の産業会館へ

長浜は近年「黒壁ガラス館」が取り上げられ、街づくりの例として観光地となってきた。卒業論文で長浜の繊維産業のことを調べていた私は、産業会館が存在する「黒壁スクエア」の通りを歩いた。

黒壁スクエアはガラス細工の工芸や体験・展示を行っており、周囲の店もそれらのイメージをくずさない景観となっている。明治期の建築を活用した

通りは、和と洋が合わさった情緒あふれる都市である。

この街に存在する長浜産業会館は、長浜の産業歴史を展示している施設だ。ここでは主に繊維工業を取り上げていた。長浜縮緬で作られた着物や反物、そこから派生した下駄の鼻緒が展示してあり、その中には購入できるものも展示してあった。

滋賀で高校まで生活してきた私は、自身が体験授業でガラスを溶かしガラス細工を作ったこと、さらに下駄の鼻緒を職人に教わり実際に作る体験してきたことを思い出した。その時は思っていなかったが、伝統的な文化、盛んな産業に触れてきていたのだ。

産業会館では繊維産業が栄えていた当時から使われている手織り機がそのまま保存されていた。施設の方によれば、写真は大丈夫だが、触れるのはよくない。また私が滞在していた時にも、岐阜から訪れた人が反物を購入していた。数回訪れているらしく、わざわざ来訪しては購入するようである。

黒壁スクエアが観光地となってから、ガラス工芸や寺社を見にくる観光客は多い。しかしながらそれが目当てでも、たまたま訪れた人が長浜の繊維産業を知ることができる立地である。近年はガラス工芸というイメージが大きくなってきたが、その他の伝統産業など、古い街ならではの影響は多く残っている。その伝統がまた長浜のイメージとして根付いてくるといいと感じた。

(2) 鳥取へ

秋にバスツアーで鳥取へ行った。ツアー内容は、クルージング・鳥取砂丘・梨狩りである。まず砂丘の方面へ向かったのだが、砂丘は住宅街とほど近く、また海とも面していることが分かった。

クルージングで紹介されたのは、いくつかの小さな島の集合である。島には大きな岩も含まれており、由来は紹介されなかったがそれぞれ名前がついており、どのようにして出来たかの説明をうけた。

砂丘へ行くと、この日は雨天であったが、砂丘には多くの観光客が訪れていた。砂丘にはいくつかの山があり、そこに上ると、崖のように急な斜面、そして下に海が広がっている光景を見ることができた。

また自由時間があったので近くの砂の美術館へ行くことにした。美術館で

調査報告

はすべてが砂で作られた造形物を見ることができた。砂丘が雨のためあまり実感が湧かなかったこともあり、砂でできるものの大きさ、可能性がよく表れているように感じた。

普通は水が流れれば崩れてしまいそうだが、水に触れないように工夫がされており、本当に壮大な景色になっている。砂で作る体験やムービーもあったが、あの大きさで何かを作ろうとすると果てしない労力が必要とされることがうかがえた。

最後は梨狩りに案内された。鳥取は梨が有名であることは知っていたが、実際バスから眺めていると、本当に梨園の多さが目立つ。自分で切り取り、皮をむく時間込であるため、食べ放題と言いつつあまりに食べることは期待できないだろう。

鳥取のバスツアーに参加し、鳥取が観光地として特化した地域・スポットを作っていることが印象に残った。出会った人々が優しく、晴れた日にまた訪れたいと思ったツアーだ。

(3) 就職活動へ

就職活動を本格的に開始したのは遅かったが、その間、大型の合同説明会などに参加する機会もあった。多くは大阪で開催されたものである。

就職活動ではあまり業種にこだわることもなく様々な企業へまわったため、今まで知らなかった、見たこともなかった仕事について知ることができた。また好奇心で動いているため、内容を聞くうちにその企業や仕事に興味を持ち、面接などへ進むことも多かったように感じる。

各企業のブースへまわり説明を聞いてまわるが、人気の企業は立ち見もいるほどで、一目で大手であると理解できた。

また企業ごとに説明のこなし方も様々で、パワーポイントで大人数に向かっているところもあれば、学生一人に対し、説明を一人つけるような企業も見受けられる。

就職活動で行った企業がどこも口にしていたのが、「お客様のために」、「ユーザー第一」といった言葉である。営業以外にもどんな職種を募集する場合にも掲げており、基本的にその根底を仕事に繋げているようであった。

大規模の説明会の中には、ある地域のスペースもあり、その地域に立地している企業が総出で参加を呼び掛けていた。私のように業種を決めかねている学生は、このような地域ごとのスペースがあるととても訪問しやすいように感じた。具体的には兵庫県の温泉街などが参加しており、そこをある程度見ると、その職種間の比較も分かりやすくなるだろう。

就職活動を通して、何よりも視野が広がったように感じる。以前は仕事に対して漠然とした印象しかなかったものの、仕事の中に本当に多種多様な業務があり、そのどれも興味を持てる内容であった。今後働くにあたり、参考にしたい。

(4) 大阪南港へ

ゼミで大阪南港部へ訪れた。現地へ行く前に大阪の都市がどのように発展してきたか、地図を見ながら学んだばかりである。そして実際の大阪港湾を見て歩くと、発展する前はこの場所が海であった、干潟であったとは考えられなかった。

港湾部分は地図の通り、工場などが多く立ち並んでおり、トラックが大通りを走行する景色も多く見られた。

野鳥園ではかつて干潟だった時代からの野鳥が、休息地として未だに羽を休めている姿が観察できる。かつてはほとんどが休息地だった場所も、野鳥園という限られた場所のみになっている。園内は緑豊かであり、多種多様の木が見られた。そしていくつかある観察所のうち、北観察所では、実際に干潟に休む野鳥を観察することが出来た。

干潟の奥には工場が並んでおり、工場地帯へと変遷していった中で残された数少ない干潟である様子が窺えた。そして今でも変わらない干潟の景観と、その奥に見られる工場の姿は、大阪の発展を物語っているようであった。

大阪が現在大都市として発展しているため、このような存在がなければほとんど忘れ去られてしまうのではないかと思う。

さらに、実際、干潟であったという場所を見ることができ、地図だけでは学べない印象を残すことになった。

都市化が進むにつれ、大阪港湾部だけでなくほかの地域でも景観はますます

調査報告

す変化していつている。現在と昔とを比較すること、さらにその変化を見るために、地図はととても有効であると感じ、ほかの場所でも実感を得るために出歩いてみたいと思えた。

4 【学生D】の場合

(1) 市民と省エネを進めるプロジェクト

i) みんなで市民節電所をつくろう！

3年間、奈良市地球温暖化対策地域協議会（通称 NEW）の方々と省エネの啓発活動に取り組んだ。NEWとは、市民、事業者、行政など、様々な立場の人が協力して環境問題に取り組む組織である。1回生の時は、「市民と省エネを進めるプロジェクト」に関わった。

このプロジェクトは、省エネ・節エネに関する情報提供、削減したCO2排出量に応じてお金を支払うことで、市民のCO2排出量削減を進める取組である。市民の方が世帯ごとにグループを作り、1年間、電気・ガスの使用量削減に取り組む。このグループを「節電所」に見立てている。節電所とは、節電した分だけ発電しなくて済むことから、発電所を建設することと同じ価値があるという考え方である。私は編集・書記班として、「節電所」参加者向け情報冊子の編集、打ち合わせの議事録の作成を担当した。その他、講演会やイベントのスタッフとして活動した。2回生以降は、イベントでの啓発活動が中心になった。クイズを通して来場者の方々に省エネな生活を呼びかけた。このプロジェクトに出会えたことで、多くの人達と交流することができた。失敗も含めた1つ1つの経験が自身の成長につながったと思う。これからは活動で得た省エネの知識を実践し、少しでも多くの人に伝えていきたい。

ii) 「節電所Times」から「茶話(サワ)～タイムズ」へ

「節電所Times」とは、「節電所」参加者向けの情報冊子である。内容は、簡単な省エネの紹介、参加グループへのインタビュー、CO2排出削減量のデータ報告などである。「節電所」参加者55世帯へ、4号分発行した。編集は私も含め2人で担当した。まず打ち合わせで、発行までのスケジュール、内容、記事の役割分担を決める。

1回生の立場で、先輩や市役所の職員の方に内容を提案したり、原稿をお

願いしたりするのは難しかった。「節電所Times」は、たった4頁、多くても6頁しかない冊子であるが、企画から発送作業まで関わるという貴重な経験をすることができた。

現在は、「茶話～タイムズ」という広報誌に生まれ変わり、奈良の情報をエコと絡めて紹介する冊子となっている。後輩が取材と原稿を担当している。

(2) 職場体験で学んだこと

i) 障害者の雇用 -ハローワーク-

ハローワークと奈良県防災統括室で実習をさせていただく機会があった。職場におけるコミュニケーションや「報告・連絡・相談」の徹底、ビジネスマナーなど、多くのことを学ぶことができた。この経験は、その後の大学での勉強に大きな影響を与えた。

ハローワークでは、障害者の雇用について学んだ。奈良県の現状として、全国的にみても障害者雇用率が高いこと、知的障害者と精神障害者が増加傾向という特徴がある。日本全体の状況は、就職件数が約68000件と平成24年度時点で過去最高を更新しているものの、新規求職申込件数と就職件数には大きな隔りがある。つまり、働きたくても働けない人が多いということだ。ハローワーク、福祉施設、市町村の職員などが連携して就職を支援している。また、障害者が働きやすい職場環境を整備する事業者に助成することで、雇用促進が図られている。就職には本人の努力も必要だが、事業者の理解が求められている。

実際に障害者就業・生活支援センター、障害福祉サービス事業所を訪問した。施設の方の話によると、パンやクッキーの製造販売、カフェを経営しているが、あまり売上げが伸びないという。

施設訪問をきっかけに、障害者の就労支援の現状と課題についてもっと知りたいと思い、基礎ゼミでは障害者福祉をテーマに論文を書いた。そして、労働経済や産業に対する関心へと発展していった。実習先がハローワークでなかったら、小松原ゼミを選択していなかったかもしれない。

ii) 防災・減災 -奈良県庁-

奈良県庁では防災について学んだ。実習期間が「奈良県防災週間」と重

調査報告

なっており、2つの防災講演会とパネル展の準備に関わった。講演会で紹介された数多くの事例から、いざという時の判断力が生死を分けていることが分かった。自分の命、家族、地域を守るためには、住んでいる家・地域の状況、災害のメカニズムを知り、備える必要がある。講演会をきっかけに、コミュニティに関心を持つようになった。被害を減らすには地域で互いに助けあう取組が必要不可欠だからだ。

特に印象に残った講演は、文化財レスキューについてだ。文化財も被災することを今まで考えもしなかった。地域の歴史や伝統を守るために、文化財の危機管理体制の整備が求められている。

(3) 奈良県の林業

i) 黒滝村

黒滝村は吉野杉の生産地の1つである。面積の97%を森林が占める。実際に訪れてみて、木の1本1本が見えるぐらい森が近く、空気が澄み渡っていることに驚いた。林業は長年、村の経済を支えてきたが、近年の社会環境の変化によって厳しい状況下に置かれている。木材の輸入増加や代替材の進出は、主産業である磨き丸太と集成材の生産に大きな影響を与えている。さらに、林業従事者の高齢化、山の管理も課題となっている。

黒滝村における学習環境調査では、役場で職員の方から村についてお話を伺った後、山口木工と役場旧庁舎などを見学した。山口木工では、「水組み」という組継ぎで接合された木工品を見学した。一度組むと分解できないくらい頑丈である。旧役場庁舎は歴史民俗資料館になっており、樽丸作りや山での作業で使用された道具類が展示されていた。樽丸とは、樽（くれ）と呼ばれる杉板を竹の輪で束ねたものである。製造技術は重要無形民俗文化財に指定されている。吉野杉は節がなく、年輪が詰まっているので樽材に最適である。酒樽に節があると酒が漏れてしまう。樽丸は、酒樽の需要減少にともない、職人（丸師）も減少している。林業を守るためにも、後継者の育成が急務となっている。

ii) 吉野の森見学バスツアー（前半） - 川上村 -

ツアーで最初に訪れた川上村は、吉野林業の発祥地である。村の面積の

97%を森林が占めており、水田は全くない。高原地区の森の中に入り、植林から伐採されるまでの流れを学んだ。木々を実際に見て、触れて、空気を感じることで、林業を身近に感じることができた。山の中は霧がかかっている神秘的な雰囲気だった。湿気が多い環境は、水を好むスギの成長にとって重要である。スギは、真っ直ぐに根を張り、肥沃な土でないと育たないという特徴がある。一方でヒノキは、横に根を張ることもでき、やせた土地でも成長することができる。伐採する際は、写真のように上に向かって木を倒すことで、倒れる衝撃を小さくしている。皮がむかれているのは乾きやすくするためである。付けたままにした枝葉から水分が放出される（「葉枯らし」という）。

関係者によると、苗を植えてもシカが食べてしまうという。自然災害以上に獣害が深刻となっている。

iii) 吉野の森見学バスツアー（後半） - 銘木業者、製材所見学 -

奈良カエデの郷「ひらら」で昼食後、森庄銘木産業株式会社と泉谷木材商店を見学した。森庄銘木産業（株）は、磨き丸太を専門に取り扱う会社である。搬出された木は水圧式自動皮むき機で皮をむかれ、ひび割れ防止のために「背割り」される。乾燥すると木は縮んで割れてしまうため、あらかじめ切り込みを入れるという。木材は温度や湿度の変化に合わせて水分を吸収・放出している。この調湿作用が木材の膨張・収縮を引き起こすのである。そのため、乾燥棟内は徹底した温度・湿度管理がされている。乾燥棟の壁は土壁で、木材から出る水分を吸収して外へ逃がす役割をしている。

泉谷木材商店では木材の加工についてお話を伺った。ひび割れ、あるいは腐って抜け落ちた節（死節）の加工、背割りをしなくても角材のサイズが変化しにくい「対面スリット」という方法など、興味深いお話ばかりだった。今回のバスツアーに参加して、吉野林業と木材について理解が深まったと同時に、もっと知りたくなった。

iv) うたの魅力発見体験ツアー - 真冬の林業体験 -

宇陀市菟田野にて林業体験ツアーに参加した。まず、森庄銘木産業（株）が所有する山に入り、目の前で伐採の様子を見学した。伐採は2人1組で行

調査報告

う。1人がロープを木にかけて引っ張り、倒れる方向を決める。もう1人はチェーンソーを入れる。枝がバキバキと音を立てながら倒れる光景は迫力があつた。

山を下りた後は、森庄銘木産業（株）で専用のカマや水圧皮むき機を使って皮をむく作業を見学した。手作業と機械に分けて皮をむくことで、ごみを減らすことができるという。次に製材所「西井木材」で、丸太から角材に切り出されるまでを見学した。節があるかないかで価値が大きく変わるので、節が出ないように見極めながら加工していく。最後に割りばし工房を見学した。割りばしは見た目の美しさが重視され、品質チェックが厳しい。注文に合わせて約10種類の割りばしを製造し、全国に出荷している。

奈良県立大学研究季報 第30巻
(地域創造学研究43・44・45・46)

総目次

第30巻第1号 (地域創造学研究43)

[論文]

インバウンド観光の意義、効果と課題 新井直樹

[調査報告]

「地域に資する映画」とは
—地域創造と映画の関係を考える— 亀山恵理子

第30巻第2号 (地域創造学研究44)

[研究ノート]

世帯数変化が自治体歳出に与える影響
—最適都市規模の観点から— 下山朗

[書評・紹介]

中谷哲弥 著
『インド・パキスタン分離独立と難民—移動と再定住の民族誌』
小松原尚

[史料紹介]

道修町三丁目「諸事書上帳」第二冊の四 野高宏之

第30巻第3号 (地域創造学研究45)

[論文]

竹富島における価値共創と移住促進
—価値を生み出す地域ファクターの考察— 大和里美

[論文]

「みやげ品小売」の上位地域に関する考察 津田 康 英

[論文]

日本と韓国の国際観光と観光交流
—日韓観光交流の歩みと日韓関係の変遷を中心に— 新井 直 樹

[研究ノート]

明治期月ヶ瀬の「梅林略図」に関する考察 水谷 知 生

[研究資料]

文部省オリンピック普及資料作成委員会編
『—オリンピックを見るために—』 小松原 尚

第30巻第4号（地域創造学研究46）

[論文]

女性参政権成立論再考：英米を事例に 笹岡 伸 矢
大槻 きょう子

[研究ノート]

住宅・福祉部局等の連携による自治体居住政策（2）
—平成29年調査・令和元年調査の比較— 佐藤 由 美

[調査報告]

ゼミにおける野外活動 2015年度と2016年度 小松原 尚